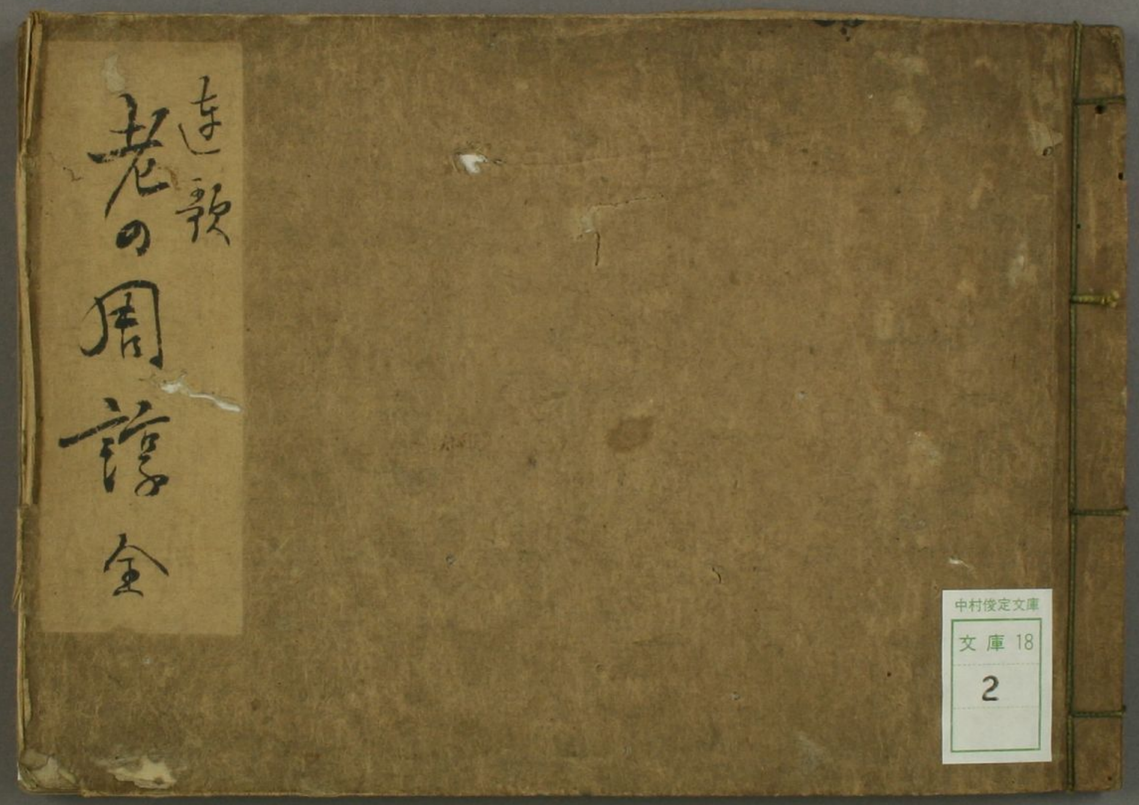

遠藤
老の周諺
全
中村俊定文庫
文庫 18
2

[illegible]の山井の[illegible]と高くて[illegible]
[illegible]　道信卿作

陽こ[illegible]
文鋪[illegible]
[illegible]
[illegible]
里[illegible]
行年もこまつ
[illegible]
[illegible]年の[illegible]　西行
[illegible]

昌平坂學問所

老の周講

秋の夜長き折から神是老の
似の人を異しとす又夜の月にて
しかるべきことなれいうしら伝れし眺を
まの原野の松をとはぬ人なく行方もなくて南窓より
東双亭にて対つて清涼
の陰にて右向ひとうまこけて
自然舞の詩絃をしらべ加人のよたれ
を祈ふく百の句をいい出しうを
付んのもつてしおもなくさい詩
乃ちとるもちまれとまれとまて老の
ちからかるまん

幽定藏

思ひ出るハむかしなりけり　昌純

岩戸明し事をそのまゝきさらきの世

新拾遺　明後ゐ空ましるまて人の世の
岩戸の関路出そ立し人　中納言為藤

誰かしし小松や高く生ぬらむ

新古今　さゝ波や志賀の濱松ふりにけり
誰か世にひける子の日なるらん

菓子と我なめ初し春も行かし

年中行事　出毎にもあなめ初る菓子を
けふつくる我君の為

香薪白散を家内のお見よろしく

欣和るや

古郷もかゝる毎年梅も紀く

古今　人そいさ心も知らす故郷を
花ぞむかしの香に匂ひける家　貫之

吾も今老のさくひかうていて

三吉野やいふり植おく花の種

六条　昔たれかゝる桜の種植て
吉野を花の山となしけん　後京極摂政

君か住し志賀の都乃花盛

千載　さゝ波や志賀の都ハ荒にしを
昔なからの山さくらかな。

夜文昔や家たえぬ春白山

月影き高津の宮の春乃夜た

新勅撰　去の夜の月を昔や思ひ出る
高津の宮の匂ふ梅か香　イ桜

匂てふめくるまてうし小様

年中行事　ことしゝる年ハきのふのあす
しら雁の山池の氷の除き倒れ
深まなり小藥乃れまいれ嶌
上陽白髪文
昨くしく雨ふりしく行ゆは
年の始めて其花山の跡とめて
後賦九年攸　花山の跡残ぬる雪の梅
年ゞ香をとめ花をみる　定家
何事も昔ほし走の成を来て
たゞなれしは鞠のかゝり乃桜かな
新古今○上東門院ちまの桜ハ鞠のかゝりに
別てみえし余波の葉そ有るの
白川の花の下かけ　雅経
萬葉つ出聖人ま回てしき歟
柳残る柳庵しる道の辺に
道のへの柳本の柳まされしおかれ昔
と思はれまゝし
昔行
昔つとて厨そ面恋すいるか
昔ゝし昔の人も我をしくれ
物我とひ奉んをも
灯をつる壁中の水残浪よりて
以しくの壁中の流にやる宇れ迄
ことよのへとある人を汲む。
故人まされとゝし　旅衣
遠情而て　今日とてや大丈人のゝへ
ゆく人昔語の旅ゝの夢
魂の残れとさく　不如帰
蜀亡帝の魂と云事ありし

杜宇なくねさへうき寝の夜かな
昔思ふ草の庵の夜の雨涙な
そへそ山ほとゝぎす　俊成
古しへの明安からぬ庵見えしも
咲日まで花見しあとも散果てゝ
咲の昔と云ん歟
あやなくも荻原なくは草原にて
更けしあやなの草をみるかな
よしのは桜ぬれぬ人なし
花君ひつかね宿りし花ほとゝぎす
昔我おもひし物をおもひわびぬる
見ぬかれおりやとも昔か
またかめの詠は花よ萱草
北堂ハ萱也母ノ居タル所ヲ北堂トハ云

ソコニワスレ草ヲ常植ニナリ
為かすて埋こし浜氷室山
堀川太郎　堀ゑ野ゝ大山の流ゝ
水室ともいひ説あり
擬子は草しをる人のかたみとそ
葵草　菊の露しける種をそ
いつれをか秋の花家そ文
氣に扇に書し筆乃跡
梅紅扇まきし物を津くも娑
形見し袖をそ侘しりし枝
七夕の夜半ほしかはし社
長恨歌
手をとりもかへし魂の僕しな
よむ宿や主人乃友千鳥

續千載。藤原門院越前にさまよひて後
人の為とみえて あらしも今は清の友
ちとせしも 續古今集に 無線
君か千年の日のなき千々の世いやさかえ
おもかりし 山本入道前太政大臣

松風 琴乃おぬ人のさらぬ千尋
うきは琴とよそにいひて音かりし
松の調に心を添へしより
えりてあたらしき袖の和音
新古今序。よりて古今後撰の記をあ
まねく人の集を選て古今しらす
みえてなし
弱竹や節ごとにぬる玉うつて
玉葛の花 庭の子方ハはなれなき

玉かつら ふかくかけしを
人の心に誰かとしへん
あふかれしきより竹の葉を深く
玉葛花。年月積り遠く
よしを置き 心ハむかしの人の
みさ毎
かくりの ころまちかしまつてと
なかく人ハ狩の我の世か
なかく人の心は思ひのしみ
えんし世をし

馬に乗し 竹馬 杖と 戯む方に
竹馬は今は杖となり戯むれ童遊
を思ひ出て 西行
織女の いとまきを 緩むるん

高人の書とかなるてかとろくく
白氏文集 琵琶行
問ふつる新名のあやかしの
胡蝶也 所しいる新の色まいて
なりしるこゝろ作らしのいと芳
者くくまゝ夢しくく
仕ふ山一叉も夜なる沙弟の夢
新後撰 秀の言葉さられて学ぶ
おて仕人一芳を思ふ 玄人物語経緯
きつ新酒しめしと学ぶ少に
風興夜寐草 恥雨祖生
なきつゝも寄まし方戒秋の末て
大祖知恵 秋しの時をを人を寄迷
一 ヶ也

山越や苔の岩根しく苔のつ
夫木 岩ゆ苔ゆ仏宇津の山
ゆるゆや立まを生かいろん
宇津の山をの下道をの細く
新後撰 大原富士を見作人
東下り時同く歌ひ
宇津の山を紙行そし見い生て
行きた五しと宇津の山越て
みゝ下をみ下尾 雅中物語雅世
万葉をみゝ竹の新市家
百敷古き新文北西 順徳院
天人とまれき仏ゆるをあやしと家
法苑珠林 雑阿含経曰 彼六天女
即歌舞第一天女説歌曰 勝妙衣

恵施　施衣因縁故　所生得殊勝
施所愛念物　生天随所欲　見我
居宮殿　乗虚而遊行」

雲ゐまて入りしを横川乃みち月
新続古今　後深草院横川の安楽谷に
渡りの比小倉仕るよしを仰下され
侍りけるを奏し侍りける　思ひ出る
雲井の月も横川のみやこ
法印しらぬるを上人
明ぬるかはなれぬなく千鳥
太同集　思ひ出る昔も遠くなりぬる
旅衣涙にぬるゝ千鳥かな　前大納言忠信
五夜の歌乃なかにも名をかけて
同上　貞和の比新後撰集へけん

風雅集にて五代の撰集にいて
名残りをしみかる思ひて撰ひける
秋萩の浦にさくなの花乃名みへし
同し名をそらけぬる　前中納言雅孝
百夜のましてをしつる神社
同上　諸社の幣帛たてまつりし
三首の和歌て詠し　昔我祈道に
住吉も嬉しかりける川波　皇太后宮大夫俊成
為家みまへ人のあしきを恨みて
岩せき先上　よろつ神の恵みかな
思ひつ轉きお法をもしきを恨みにく
あはれとおほしめしてれは之言
詠いてむことはせしをこゝをたえ
詠み

[illegible]

同巻 同のゝせきとあがき法花
なとけたかなれいをくとをかけ
わくよし誰さまくかわくいるいき
るもを世の騒きをと思い出さに

[illegible]人の同ばやくみも法花をして
同上 二中文六の祇へ尼海いとかりまて
あるさるかれ同つやふ法花を
たるかきのあやしく苦思い出さる
さるなれいとつかれ

[illegible]

同上 山文をそかるを文をえて
方をかりるかれ人へ行平同ゝ
むすきるれ光苦まゝあるる思ひ

出家と思いとゝ法花
法をとゝ花也へかくゝ云ゝ
法華経 聾盲瘖瘂 医氏をさと
ゝとゝ大意ゝ[illegible]ゝ[illegible]
物名 [illegible]
若草上 [illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

同上 さるへき[illegible]
[illegible]苦の世の行い人やをの人を
思ひてはいとかるくとたほれて
仏をや世をを思き法花して

同上。世のうつりにしたがひ色
々の事ありけるもの歟
しらんとなり　昔のものがたり
なるべし　中比所々に世の乱れ
春秋かりそめの御事なり
同上。入道の帝は法師にしてしかも
太子にて門のほとりにも必今の秋の
御事なり　昔異国なるまことの
仏法　天竺の神も仏に祈れく
吳山の神も神に祈れく
八幡御神託　昔在霊鷲山説妙
法華経
御仏のかたちを彫しあらはして
新葉集。正平正年五月四天王寺
金堂造立せらるる供養の時の
はとめなる　秋世にて清涼殿の余波
ことしなること昔の沙汰なき　太平記巻
なをきてまきりつつ書文
若宗下。あるこの人の文をとて思い
やなく書られ給ものるまこと
四月一日八月なるよりこの屋
おもつかとるときつつ社をまきり
京の紙屋人帝の月をもてあそ
同上。まもなくこれはさの母さまの月
あきの人のかつらもおりかた帝の月をも
あまつきたい昔もとりしたとれなる文
いつることなく
若宗付録一　左と沙弥
横笛ばかり人きるかのかたり

横笛是。はるの節をとりてなれば
なをまろんとき可也。代々くゝ学む伝
しとゝ——芳をとりてこゝとも
さても花ゆゑに宿かりの妹の友
人々の制也。宿かりの妹の友
彼家の是。月乳間しを井ゆゑ
あかつゝ宿かりの袖かりの袖ハ
ゆゑかんうれと芳今のはる孫の袖
つけられるもあんなり
とゝ家也さんゝ保きちきうゝ
り勢是。命ゝ定あるれとも
注ゝ可也。世も昔のゝ面白
注ゝ世も立ゝかり中れ
ゝ後保ゝ是おゝ

加茂川の辰ゝ一郎朝
風雅集 主殿の芳の青の意きハ
辰ゝ家しが茂の心 佐成

葉の夜いかゝくゝ
御伝是。昔大内の是れ世無也
ゝ川の陸を東ハ
枝物の是ゝ月の新の時ゝ
ゝくゝと今月八日ハ
吹風の聖分ゝ
同是。風ゝ立ゝ吹芳青の
月ゝ立ゝ是ゝ
是ゝ又作の花れ是の心
なと人ゝ吹風いつ
ゝ

[illegible]袖の[illegible]
同巻。芳方の[illegible]母上失[illegible]
はなすなりしたれ[illegible]
いまの秋さ[illegible]の人花[illegible]
[illegible]神[illegible]
たふ[illegible]
幼巻。其[illegible]人[illegible]
[illegible]
いけ[illegible]
行[illegible]
今[illegible]
同巻。[illegible]
[illegible]

[illegible]の中山[illegible]
年間[illegible]
[illegible]
[illegible]
新千載 雪の中[illegible]山
[illegible]
加茂川や[illegible]
同巻 今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
同巻。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

陸奥守さだたかぱくしゅ人もなし
白宮巻。君はれき史弁後鑑法門
立つきふべき人をたつの法師くあるを
かくうたう

皇の九代下てゆ仕ー七
新千載。述懐の家あ母後伯りゆ
九代の多ゆ仕ぬるを世のてよある
九代の君ゆ仕へ年も経る花をう
き咲ぬ思い出うしも 法大僧正道昭

尺て色る花の春をよ正に
同上。毎ゆ元僧正伯りゆ母世の春ゆ
緒ナ雑部をー 咲き世之芳
はを立ゆ花の春をよるよ知れも 権僧正永縁
神れい花も世ゆ人里深り

同上 花山院お関大臣宗相中将伯
ゆ忘母の後ゆ
百人一首 白しを
思い出て袖れい花ゆ 花山院ゆ 内大臣
のこりやうき世ゆ春ゆ乃ゆ
同上。大永六年九月後柏原院の古ゆ
僧ゆて伯りゆ 宴三年の秋又花山院
法ゆ也ゆ伯ゆ伯ゆ 思い出
尺ー世ゆ春ゆ乃ゆ 法大僧正祥助
乃ゆ乃ゆ

世ゆ郭ゆ行ゆ伯ゆ伯ゆ乃山ゆ
新後遺。谷上を云処ゆ花ゆ伯ゆ関山を
ゆ伯ゆ伯ゆ 大人父後新の行ゆ
ゆを思い出て車をゆてゆ伯ゆ
伯ゆ 奇人ゆ行相伯ゆ

地名辰せきとあてゝ　新ガ石
哭くも地名苔の仮ふ
年は行き交かうれ苔の袖をにな
いもて年のかりて立る使ひ
巻庵の屠よ我り来ず
第人のもゝ歩きて浦山
高ちや枝ちつ同乃法の多
数遺　懺法の歌数多ゆてよし
ほとゝぎす　今ゆもと高くなれ　枝主
同のなきは法　岡本お関白左大臣
蜻くも蓮の門を人とし
竹川巷かんの天ため　ゆいてかくいと
茅原く年り蓮の門をよきかり
はゝ法人もも天苔の法す異い生

まてゝ人ちとゝゝ市巷ゆ
行ちゝ車の音や迫ちゝ　行ちゝ車
同巷　陳のかゝ　行ちゝ車
の高きの高くも苔ゆす異い生
まてゝ　蓮ゆ　泊法
人のもか宿もちゝ　ちゝ行る
橋姫　かゝ信濃の国　行る
苔の人　泊か　行ちゝ
なゝゝ　人も宿も　煙ゆ
を行て　我牙法　法ちむ
尼ちゝ山ゝ入　やゝき　煙
伊賀物語　異い　尼ゆ　山ゝ入
てをゝ
いちゝやゝゝゝ　ゝ法の楽に

同老。太刀人ぶかくいちはきみだ
をなんしてうる
女市花婿を立て　おもい山
女今庵。男山の昔を取りいだして女
市花の一附をつくるまもなくして
て庵あるべし
隆まさる梅おもさまふ川風あ
椎本老。かの聖の文を出さし海
松なれい遠風を吹くる響を学まる
昔の月花あり。是て笛をいとなう
もしるべきたるかれ祇なる人昔の
六條の院の古笛の音学しいかに
おもーけまおいまやーつき出る音を
ナンそのうりの光をいかもこの海ってー

千時寶永元年甲申六月十日

法橋昌純

花は雪に時しる人のなげれば
ながめすごしたるかしこ
法橋昌純師の猩々の詞
ゆかしく
ものあはれなる
ものかな
ものの数も十つ
の昔思ひ出
ものの金ふも代りきあり
ほうさ
ほうさ
蹇兎の食驢を羨ましい
謎と聞くいにしへ流されしんのみを
春くれば鶯のなる山鳥のうかれ
昼間しのびなく
いまは云往あんかし

うれしかりけんなとゝかきけり　仍隣

いそ疑し年も明れは四方かすく
いつもなる日新しもの春めかしく
似到し　あさ人ゝ鄙そそめかして
栈人ゝもろふの子日てゝそなりれ
栈の楽しさも子日の遊ひにつけても
鶯の梅か行て舍り来て
雪きえん　山ゝ霞ひらけ行井に
白き色の紅梅霞に　紅霞丹霞なと
いふ人ゝ霞のんせ　山桜て夕暮
名残れは霞も人のんしか様
種ゝ梅も春の吉野の山桜
代し世をすてせ影なき花の色

忍ふ　花の色はうつりにけりな徒に我身
世にふるなかめせしまに
遠く来し都をみれは帰る雁
人の庭の人に　立春の花の種を
帰る人　人ゝゆくさきんとり
ちるさきに先来し色と恨みん　かりま
歎し我も浮世乃毒誘ひて
ちまりきん　うき花深く恵衣
世中の人の心も花深のうつろい
四はるその身てきゝ給
人も見ぬ花の本なる梅桃し
春乃　花の本もみへ梅桃し　まゝか
しつろふまゝ人なすいろ
ちかくしは　誰も喜めし衣きて

仏佛を降くきのよ神祭
昨は神業今日は佛を奉るこ
子紙まこしのうとかりうちあ
行ゑ〇社宮も降ぬなるまいうとも
人とうるや
印法うまれう雪の冬けりり
雪の色をうこいて降る印法小卯
の国人みうりうる今年 庄なり
みその人をうるし
閻ろ月も去年ちゆき花達
達は泥ぬをれ人のんは抽毎
降うり人うう 雪原の閻ろ
ちねんて行かい家を主とあきむく春
咲き月を食火かけ
ゆきりけ

ゆう乳の花をかいうかは野ゆうを
源氏光源の君のんし
年ゆれし 赤橋花の花そうき
源氏赤橋をゆえ印後奥の
赤ぶうう人の野ゆなるの来し
ゆしとそいゆ甲斐を野ゆ府何
府は夫婦の望ゆうゆ抽ゆ
人をのこ根をううんうゆ
いゆうり 羅と思ゆ 後撰 男のん
かうれは府ゆ書ゆ 奇ゆ
七夕の七ゆ 牧ゆ 牧ゆ 唯
秋もゆ 源ゆ ゆいん風立て
源の物よゆしく源ゆの文ゆ
かうは人のんしゆ

吹ちらす野風なれば秋萩の
しをれふすがの花の
白露かたまる間もなく化ける
間のあたかりしかを白露のきえ
なんとて何思ひしりん
附句 山の木紫とまるとく
時雨ふる木の葉のなかりんとうつり
かりしとなり
宮の森の紅葉あるかなきかの
志茂ゝ枝月鈴と掛合
萩の色掛を月鈴に掛合
江の水に陽て月城深川
水の陽に月見に深川の月鈴の
かりし陽は鈴を平沢に
社月のんろうろ
余の陽をかすかに
鈴しかれをと人を
社余は孝をのこ
薄七る山に雲ゝ
りつゝ雲に風の色をしるゝ
正本北菊保の
月鈴ゝつ芝高寺深き山清水
山人清水をゝ
夜の鈴をゝつ
ゝ移ゝ
きの興ひ
陽ゝつ
ゝ

或は本社の事乃ち家
尾張と更に高名を高砂
袖の又も所なる色や我なりい
袖の色にわるる又を信じこそ
かりの数ふるもよ
時ならぬ舟さし寄る重乃皮
子獻尋戴文故事や
尾張の吐参の会のうら山し
大原やもとの国しまるして
宮廻りのんし
皆人のしるふ神やアル法
人言も神はなるとなること
彩かしなと神ちいれあるむ
神の備の事なるかるてう

うつ弥の色の尾張の中が彩於遠
よくとけハ拙きも入法乃道
子のあるもしも法を探るし
亜母三遷のんし
法の親と思きるとてうくしも
関子養の加乃名述へし　継母の恩
寒ちるし

武士も多き詠よたけかして
悪かり人なもるふ無跡に
苦しきて年間なをふ世乃
藤武持節くいくて舟乃
うとて当きつる世幕の成よ
拝果て都も移ち東乃方
昔住し於て遁世の後ハ藤を恵く

人の世も松の常緑なるを羨まんと計れ
信れるを世を傳へんと
漢高祖諸王如意に世を傳へんと思い
ゑしくも

松も松宿れるかしらの白きこそ
松も松宿れる昔の宿なれかりそめ
人のなさけ

百年ばかりの人命なり昔人
上古の人心を書して百歳を尤も
しかも近時の人心を昔よりは早く
夫死生素問上古天真論の人心
新きも貧しくなれば跡
貴人となりて尺をつゝ
人の拙きを砌に立
芳州勇士を捨てこそ大和物語
少を捨て世を捨て澤の池
宋世の帝に高き
今を我はなんぞ玉あるし
我も世を捨てなれば
しかるに社なりけれ
をつゝ男参則れば古あるて
都より住かめや伊勢の浦
伊武原人必逢きまし
捨ぬるを山何毋捨て厨あるく
逢ぬるを命なりしかれて
時まで逢ぬ人を思ひ
今のかしくしをば
ふるる袖せ

住住なれば古文に
楊貴妃の思ひ出しまし上陽人の心
併しと考へ合せ其他の國
王照君うん
累に又雅通しとも生き恋し
玄宗三年の住居を移住
唐衣の人を出せと疑いて
有り所を移り移る人唐衣
うかれ女のめし宮ちまして
きみを文市にしるぬん
平仲さま 大和物語
山月の影をうつし袋かて
浅香山のけさ又恋る山井のさくい
人を思ひ初かい 同上

上のかゝ下ゝ下まて思ふ
源氏第本考思定の図
今小又恋ふる人
文古人にかゝる迷惑
源氏明石の老の上の
京神てうきに
人をそうしてかゝ
うつてもかうしまや
瓦瓦乃手ちや京の下むし
誠にかりうんかりかゝ
雑下もし
下まつと考へ新
玉章ぢちまき文
尾張川関所みち

浅深

ものとなる人妻の
後中も安達の赤ら達きの
ものさらしの
人の色を見くらべる
竹赤を見る度ごとに又庵
志りなるを知の又度ごとに人
望のはれ美
中主はるもはるる常なる
形見を身は大和物語
井手の下草のごと
謀をもって軍人
新しき家なるしへ所なく
功のなる所の国にさ
功成名遂て退き国風うつる道

あるくの画書の
砌酒をあしらう
君臣中もさ
信をもって
住つるてのうち
都の近く習ひ
部をもの同人
あるしの道の
項羽をんを
笛作の河くいのて
品を律に
晩秋の山
去秋の
天地の人とれ

讀[illegible]の[illegible]の[illegible]尽くて
樂[illegible]この[illegible]ハ[illegible]郷[illegible]

馬はらり　百句附

車ハ轍をとて行[illegible]人ハ
京をとゝまる道を失ぬなり　中頃
春の[illegible]黄鶯[illegible]
[illegible]千化[illegible]
あり　廣き河の林をなして[illegible]
[illegible]百千鳥野々春ハ日永をに
[illegible]駿[illegible]

たゞ[illegible]　仍陳

[illegible]
[illegible]

むしのすだくを為家卿前栽の方
に詠まれし歌に朝ゆく宿の海
むらに尺に立る霧を分て折る人の花を
我も初るとなり

柏葉小路を出て人くるや左乃月
伊賀物語。あり人ある柏葉小路の月の傾く
まにまにとしるべ月やあらぬ春の
夜の夢ばかりは昔にかへれとなり

胡蝶

荘子に夢に蝶と化して飛つる妹のかまねのもとに草
葉の上に蝶の姿はかりは芳花
もしをれ花をみるにつけて夫木二貴
重井より霞を分てとふ人に

二條院基提樹院かりしの例に後の
去黄泉更生て方丈の三経を付すして
付るし　古へ死別の悲歎を慰
とや雲を分て君を見る人ぞ知人しれ

馬さし　里馬

正暦二年詠闘の番梅の枝に付て
道信卿の里馬のこゝろをよき
世の花豊かに立てもかをる外実方

里

おかり花を求て来て窓つゝ人を
昔我思ひ出ぬ道信朝臣

唐人乃ちとはゝ人てゆめ水
鼎水宴　唐人の詩を作る事の
信かたかりしかり定家

石上きしやしも青やおもしろし
石上ふるき都のほとゝきす声はかりこそ
昔なりけれ

庭の松花は花のさかりにて
吹風に忘橘や白きの昔覚ゆる
の庭外 新古今 釈教 梅檀香風悦可
衆心ノ哥

今日まで忘れぬ菖蒲の袂に泣く
さふれいあやめも忘るる袂の昔を
こそ袂のかはらずて 新古今 哀傷

鱸は淀の鯰とまで秋の暮れて
秋風に吹御殿出て行く人の
人花社まさ 張翰適意ト云

汲まれは時の澤の水まで水

いにしへの時立伏の志の思ひ出らし
袖を濡らし

うき秋のならぬをしつゝおもはせに
夫なかな昔をおもふ秋風にいとし
殊と藤の小萩 新古今

誰まちは忘さりし唐比園
古の庭修暁の華のみさんの月そ
学さきりし 鹿野園や

かまつね暁はさすらふ帰しく
かきつね昔のまゝ思はれる大将
世の夜なりね世 源氏須广巻

虫の音も萩の葉風も以て悦く
袖ぬらし萩の上葉のな中昔恋しき
ものあはれ 新古今 入道前関白

みる人もなくさめぬ廿六帖集
廿六帖もみるまゝにものかなしさまていとゝ昔
の秋そ忍はるゝ　同上　清慎公
をりてみる袖の露かな草葉乃秋
一品資子内親王に逢て昔の事なと申出
て読侍りける
袖ぬるゝ人秋のよるにそれ
はゝ涙は恨の袂ゝかそへつけて　新古今　斎宮女御徽子女王
夜も深く袖もぬらしの秋乃月
待夜月して袖にかくしも昔の秋
を思ひ出れは　西行
袖ぬらし東葉の露残思草
老後昔を思ふ事侍りし　明覚に昔
をのこと思ふ事露末の露は袖涙して　成仲
月けもかゝる蓬乃露残りて

此世にて昔住し宿ならんとよをきり
ある月をみまし時　西行
あかくも惜さの月をかき曇りの
月あかき夜宗家卿に逢て侍りけるに
三とせの後よ志侍るはいつとそよその
るまゝと読侍りけれは紛く侍り対
西行に久しく逢侍りて思ひ侍ら
よもしてそのかたらひ語りしに御侍りて
昔くは惜さは月の影そかし昔語りに
夜やふけぬらん　法橋行遍
なかめて聞しは雲れつれしくは
伊賀切れにならぬ人もあるに語て夜もすから
侍りしといと物悲しくて語りし別れ
後久しくさやかにて古のことなと思出て

きえやらし　忘れては夏かとそ思ふ
かりいほの露ぬるゝてみをみえては　業平
こともとてせしらん雪乃竹
いつ斗雪の下臥竹の子の親見しへの
むしをらん　夫木　孟宗故实
小忍衣きてもみえさといはやしく
後冷泉院御時大嘗會のひけの人々を
して　定基朝臣が許すせ侍ると　よみ
なかく
請きまきはゝ山井のかなめゝく
此時の各れ前人まて請すま侍りけるを
其日内侍して後冬の目差しけるに
旅年ぬ山井の水ゝみえてしなき哉
そのかゝれなきを忘れてや　二条方朝臣

忘れし
いかくの山のあさは七八たむ人の成と
まごりなりし　道信朝臣
磯垣　垣もなかれにし　降雪ふ
文鋪の昔作り家の傍を清き網ゆ任
ならは雪こそは降て磯の垣も倒まて
侍りけるに　駅のつゆく雪の室は見え
まのりし人は昔の垣跡生くへ人　新古今　赤染衛門
折年　もう花ありてわしく庵のそた
昔思ふ庵にさる雨の中き寄て　野世
ままぬれ年の名れ外　西行
立居る　待めは天の浮橋に
桐名乃の桜社まさしれ忘しん
あはれての隠の人まても見えは昔は

物狂ひ思ひはさくりけり
若葉花 若草 ちりしきて
ちらぬ若葉 若草の上 杜若の
花ハ人くれ
恋しさハあさましき我ん
古に行末ゆるす心の那 恋ゆ上海
に物思ひ捨て
恋とハ人こそ縁しき若しくて
伊勢物語 あふ事しなくハ思ひハ絶へし
あさ人たく言葉若しかりけり
いさかふ言葉ときし旅路いつさん
若物語よそかくるハいつし雨夜
の思の何しの大臣とおもひ出てしそなた
例をなくし出てく 源氏ゟ出た

花とまけハおもことをとめの塚也岩
大和物語 をとめ塚
雲と成り雨と成て夢の逢ふことし
楚襄王巫山神女ニ逢ヲ 朝ハ雲暮ハ雨と
あふ古の夢の見へよ旅の泪
祈りける光さらにたえなきハかく
世界のはきをハ祈りかれしあしまてよし
ぬる光たにたえなかりしにつきし
あつしおるる肴なりし物をあさと花
おいかくふにつけても昔のすかなふつ祈
あはれしく竹臣かな
月涙かいる時乃なかくもし
いそかくれむし月ハ涙深
時の有き多なる人末木

明治初年廃藩置県の時に舟に上
[illegible]
思い出て昔の事を[illegible]
かい社なれ庵間いつて昔の人の[illegible]
[illegible]ばかりの[illegible]
[illegible]昔の人の言葉をきいて[illegible]
[illegible]
[illegible]
伊賀物語 美しくて行者よりは[illegible]
[illegible]
[illegible]
北野に[illegible]の美乃[illegible]
[illegible]美[illegible]思い合せて
[illegible]美 [illegible]円
[illegible]三代まで[illegible]

[illegible]
[illegible]
戦ひの[illegible]
[illegible]
[illegible]

思ひ沢いたに無世を恨果ぬ

末の世は人と絶をも忘れ

彩雲へ　行末は我をも忘れ人さあらん

昔我こゝろ人なりしに

有ながら世の人こゝろ世の中に

同　恨をし昔の人に代なくて在命

ながらへ世をもつる

我為と親の罪なりし　住山

年ふれと立まよふ袖の童子

左茅子の故事

こゝに命こゝろ有のこゝろにて

歌人ゆゑ人なれとまた雅俗の

さに望さまし　右京に大江船言

命あらは後の人に清原の雅俗福江の

世をうらみ恨と云しをんおてよむしまを

さは我世をそむきに　月日を

西行法師山中にて昔出家

侍し月日を過て行ものと中し重る

過るに　こゝ世に　月日は流の如

来て　我身は頭成の如　條院

世を恨山にこもるよりしの人

いかへ世をそむき法師山に

こゝ齢の人

煙　梅もゝ花ちるこゝろ　煙

新古今　四月十日　梅

むさぶるこゝろ　左上天皇

文五年　玉かつも　に

作ものの作者　法泉院の作文の所

ひとへ年をつもりぬる我が家の門前
まつもるるとく　往昔人丸のすみかを新
かしこのてハ衣の裏ぬらしけん　京三條院
夏　夏も冬の月をみるまきれなく
老くゆくかの髪のつれあさ
旦て冬月　庭も白妙に
旦て冬月　月もるるハ昔ゆえ夫
庭の雪ハ絶ゆる　定家
友あハ　山里ふるき世語り
山里ふるき世ふるもいと友もかれ柳
さ一昔ゆえん
友もなき山の庵ハ冬ふかみ
同行なる多人おつきはなく生ふ
思い出てある　妙つと高き法の林

以友なる山の庵ハ冬ふかみ　家慈
雪もしらきあ一御車の行方
岩花物語月華　綱代車にのるハいきに
ゆるまれハ一　黄昏京のおくの法
ゆくるをきそ

かりそ忘にかりそ　契ハ林
拾遺　吳山の秋越のおもにちらして
さ世ハ木の葉ハ　つる水　夏
伽羅法御供に　ちるく
文殊の法華　海雲門僧正

世を不知ハ
世を不知ハ　寺ハ
立りん所を　ねとめ
まつ法の師に　りえて

[illegible]ける[illegible]八佛の
[illegible]行ふ 後鳥羽院
[illegible]の法水
新六帖 [illegible]
[illegible]
佛[illegible]
新古今 後鳥羽[illegible]
[illegible]
[illegible]

出雲国造の神賀詞

霊亀を得しうるの秋津國

新嘗祭神祇神日本盤余彦天皇

天の霊亀を秋津島に

[illegible]

紀伊国有栖川

新嘗祭。後宇内聖王陛下位に後宮内記

王[illegible]

行[illegible]

出[illegible]

有栖川同一流八幡[illegible]

昔孔[illegible]中院右大臣

いって[illegible]

本朝[illegible]

[illegible]黄帝本草経

[illegible]

相如題柱

昔[illegible]

[illegible]

[illegible]

問をうしなひ　社寺再興願書

なつの京ゆかるゆふべの古すをこれ

梅ヶ枝のうつの　姫小雲

新亭　貴人一度の山行ゆ年古く

あしの高を梅ヶ枝ゆ

二度もまく　社氏のうつるゆ

陽侯氏の風の陽侯ゆ二度ゆ

今しりく　定家

板ヶ橋の沒陽　玉姫

新六帳　古のさかり　玉ヶ橋

桂子侯陽ゆしりく

陽侯風ゆ　ゆきゆ

新亭　陽ゆたゆ人のゆを

昔ゆ今も語りさりく　後朱雀院

なつ山を聖氏御代の　詠ヶ見

古人の歌の氏代の　詠をうそ

をゆ氏を詠ゆ

水茎の中ゆ陽氏声あく

新亭　水茎の中ゆ　詠侯の音

谷の柄ゆ　ゆ

王貴ゆ故文　古々ゆ　はる山ゆ奥

谷ゆ文の柄　有を意ゆ

宿　おく　毎ゆ　梅を紙ゆ

新亭　いゆ　四氏ゆ

ゆを氏ゆ宿ゆ　ゆ

多ゆ氏ゆ　一ゆ　聖人ゆ家

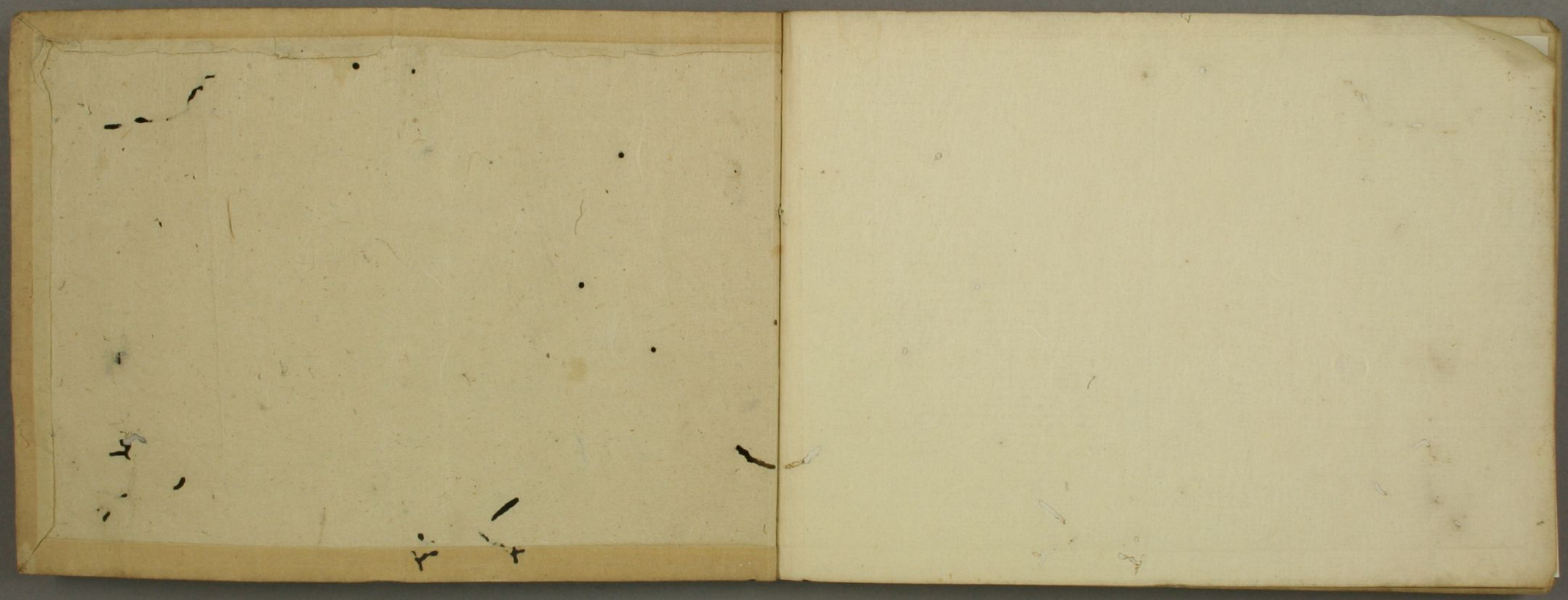
同上　聖を　一ゆ

文に当を思い返さん
煙なりき山の色ぬるかの山

人々に詩の題を書きに関紙て
函谷関のこと
羽衣織きてやの下し天の原
竹取物語 人々に天の羽衣きるおそ
天に成ると思い出るかぐや姫
きて者ハ主隠れなく成ぬ笛も知少
文選十六 思旧賦 鄰人有吹笛者
嵇叔夜 嵇康 寒亮
南楼の月やいかなる人なれば
かく者ゆる千しのびいるかの
彩雲今 入道摂政の事に方琴行れるか

水際に千しの光いかなる花か黄の紅
尺くさをなる
海をも見る海の通路
嚴陵去釣の所
行とも通ハ山をきり敷て
関屋に巻。法人の門と表に分て
おろる為にと大を書て人を出て女も
人々に昔のこと思ねばこと
物まれ 行とも出てきこあかしを関さ
海ハ海水と人分くる
西に行ハ舞の光て
遠籠点滴如琴筑支枕迷齊聽始音憶
在錦城歌吹海七年夜雨不曽知陸務観
かかる深ハ駒とる人

[illegible]

[illegible]

[illegible]